

# ガラテヤの信徒への手紙 1 章 1～9 節

2019 年 8 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 352 番 「イエスキミのみ名は たえなるかな」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 342 ページ）

4、今日の内容

今回からガラテヤの信徒への手紙の本文に入っていきます。今日はその「導入」に当たる部分です。



前回お話しましたが、パウロはこの手紙の他にも多くの手紙を書いています。しかし聖書に収められているパウロの手紙の中で、ガラテヤの信徒への手紙の導入には大きな特徴があります。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	啓示としての福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	使徒たちの受入れ
	2 : 11～14	ペトロ批判

それは、他のパウロの手紙では、挨拶に続いて感謝が記されている（ローマ 1:8-15、一コリント 1:4-9、フィリピ 1:3-11 など）のに対し、ガラテヤ書には感謝が見られないということです。

わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。こうして、キリストについての証しがあなただたの間で確かなものとなったので、その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。主も最後まであなたがたをしっかりと支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者にしてください。神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。（一コリント 1:4-9）

このことはパウロとガラテヤの教会の間にわだかまりがあったことを示すと同時に、一刻も早く本文に入らなければならないという緊急性も感じられます。それでは手紙の中身に入っていきます。

## 5、節ごとに

### ◆挨拶

**1:1** (パウロ、) 人々からでもなく、人を通して(によって)でもなく、イエス・キリストと、キリスト(この方)を死者の中から復活させた父である(なる)神とによって(からの)使徒とされたパウロ、

手紙の冒頭で、パウロは自己紹介をします。パウロは自分のことを「使徒」と名乗っていました。イエス様はその活動の中で、弟子たちのうち 12 人を呼び集め、使徒と名付けます(マルコ 3:14、ルカ 6:13)。彼らは 12 使徒と呼ばれるようになります。

彼ら使徒はキリストから直接召されており、福音を宣教する使命を与えられています。十字架にかかる前のイエス様に出会い、直に遣わされた者でないと、本来使徒とは呼べません。パウロは十字架の前のイエス様からは、直接召されていません。ファリサイ派であった彼がキリストに従うようになったのは、十字架より後のことでした。

したがってパウロが使徒であることに対して疑問の声があがっていたのでしょう。「彼はエルサレム教会で認められていない」、「ペトロはパウロを使徒とは思っていないようだ」、そのような言葉がガラテヤの人々の耳に入っていたのかもしれませんが。

そこでパウロはまず、自らが使徒であること、それも人間が決めたのではなくキリストと神さまによって使徒とされたことを強調します。ダマスコでの回心の出来事、復活のイエス様との出会いによって、自分は使徒として召されたのだというのです。

**1:2** ならびに(また)、わたしと一緒に(共)にいる(すべての)兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。

兄弟とは宗教共同体に属する人たちを指しています。男性名詞ですが、この中には女性も含まれるのが一般的です。

ガラテヤは広範囲な行政区名であり、ガリラヤの諸教会はアンティオキア、イコニオン、リストラ、デルベなどの都市に点在していたと考えられます。

また教会といっても宗教団体というよりも、一般的な集会という意味合いの方が強いようです。



**1:3** わたしたちの父である（なる）神と、主イエス・キリスト（から）の恵みと平和が、あなたがたにあるように。

この言葉は、パウロの手紙に多く見られる祈りの定型文です。聖公会の礼拝の中でも、同じような祈りが見られます。

父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、常に皆さんとともにありますように **アーメン**  
(聖餐式：祈禱書 183 頁)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、わたしたちとともにありますように  
**アーメン**  
(朝の礼拝：祈禱書 35 頁)

ちなみに、パウロの手紙と聖餐式では「あなたがた（皆さん）」のために祈っています。この場合は祝福の祈りといって、礼拝では司祭がおこなうことになっています。これに対し、朝の礼拝などは「わたしたち」のための祈りです。ですから誰でも祈ることができます。

**1:4** キリスト（この方）は、わたしたちの神であり父である方の御心（意志）に従い、この悪の世（時代）からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの（諸々の）罪のために献げて（与えて）くださったのです。

前の節で、恵みと平和がキリストからあるようにとパウロは祈りました。キリストの恵みとはどういうものなのか、ここに書かれています。

その目的は、この悪の時代（邪悪な時代）からわたしたちを救い出すということです。このような言い方をすると、あまりピンとこないかもしれません。一方でイエス様はすべての人を救うために来られたという考えがあるからです。

パウロは、二元論と呼ばれる考え方をしていました。それは簡単にいうと、善か悪か、命か死か、霊か肉か、味方か敵か、必ずどちらかに属するというものです。この世が「悪」であるから、わたしたちはそこから離れないといけない。そのためにイエス様が来られたというのです。少しここは、イエス様の行動とは隔たりがあるかもしれません。

「わたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの諸々の罪のために与えてくださった」という表現は、初期の教会の中で語られていた信仰告白であると考えられます。イエス様が十字架の死を選ばれたのは、わたしたちの罪を贖うためであったという十字架理解がここに示されています。

この節の「罪」は複数形になっています。ユダヤ教では何度も洗礼をおこなっていたそうです。ただ一つの「原罪」ではなく、日々の「罪」を清めようとしていたのかもしれない。

1:5 わたしたちの神であり父である（この）方に世々限りなく（永遠の永遠に至る）栄光がありますように、アーメン。

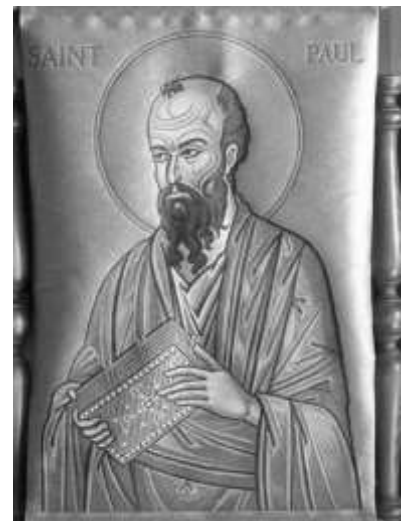
この節は、いわゆる「頌栄(ドクソロジー)」です。神さまの栄光(ドクサ)を賛美しています。パウロの他の手紙では、頌栄は手紙の最後に書かれています。しかしガラテヤ書では導入の最後です。感謝を書かなかったので、そうしたのでしょうか。

「世々限りなく」という言葉は、礼拝の中でもよく用いられます。ここでは永遠の永遠に至ると訳しましたが、正確な意味は「永遠の昔から永遠の未来に至るまで」、つまり神さまの栄光の永続性を強調しているのです。

#### ◆異なる福音

1:6 (わたしはあきれいています。あなたがたを) キリストの恵みへ (によって) 招いてくださった(呼んだ)方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの(異なる)福音に乗り換えようとし(向かっ)ていることに、わたしはあきれ果てています。

わたしたちは、どのような順番で手紙を書くのでしょうか。最近ではメールや SNS が発達したため、便箋を使う機会も減ったかもしれません。でも書くとしたら、時候の挨拶のあとには、近況報告や相手を気遣う言葉など、当たり障りのないことから入っていくと思います。しかしパウロはいきなり書きます。「わたしはあきれいています」と。



「あきれている」という語は、一般的には「驚く」と訳される言葉です。福音書の中でも、奇跡に対して、あるいは期待以上の信仰に対して用いられています。しかし否定的な「驚く」もあります。イエス様が弟子たちの不信仰に驚いたこともありました。ここではガラテヤの人たちに対する「失望」というニュアンスが強くあらわれています。

パウロは何にあきれているのか。それはパウロが伝道旅行のときに宣べ伝えた福音によって呼ばれたはずのガラテヤの人たちが、すでに離れようとしているからです。異なる福音に向かっているのを伝え聞き、筆を取らずにはおられなかったのです。

「こんなにも早く」という言葉で、彼らの不信仰は強調されています。イスラエルの人たちは出エジプトのとき、荒れ野で40年間さまよっていました。そのときも何度も「こんなに早く」神さまから離れようとするのか、とあきれられたものでした。さて、では異なる福音とは何でしょう。それは次節以降で詳しく説明していきます。

1:7 ほかの福音といっても（それは）、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし（かき乱し）、キリストの福音を覆そう（曲げよう）としているにすぎないのです。

「異なる福音」は「別の福音」ではないとパウロは言います。「異なる福音」とは本質的に違うものを指します。一方「別の福音」とは、同じようなものでも少し違うものです。つまりパウロはガリラヤの人たちに、「あなたたちが向かおうとしている異なる福音は、考え方が少し違ふとかいうレベルではなく、まったく間違っているものだ」と主張しているのです。

現在のキリスト教には、たくさんの教派があります。そのような違いであれば、パウロもここまで強く言わなかったかもしれません。しかしパウロにとって、ガリラヤの人たちが向かおうとしている「異なる福音」は、異端でしかなかったのです。

ではパウロに異端扱いされた「ある人々」とは、どのような人たちだったのでしょうか。前回は少し触れましたが、彼らはユダヤ人キリスト者です。同じ「キリスト者」なのにどうして？と思われるかもしれません。

ガラテヤの人たちは、いわゆる「異邦人」です。ユダヤ人ではありません。したがってユダヤ人の慣習である割礼を受けていませんし、律法も守っていませんでした。パウロはそれでもいいと言います。ただ信じるだけで良いと言うのです。

ところがユダヤ人キリスト者は、ユダヤ教という土台の上にキリストの福音があると考え、ユダヤ教の伝統や教えを守る必要があると説くのです。

1:8 しかし、たとえわたしたち自身であれ、天（からの）使（い）であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせた（宣べ伝えた）ものに反する（から逸れた）福音（こと）を告げ知らせ（宣べ伝え）ようとするならば、呪われるがよい（べきだ）。

その「異なる福音」を聞いたガリラヤの人たちは、ユダヤ人キリスト者の教えに流されていきます。近くに適切な指導者がいなかったというのものもあるかもしれません。しかしそれよりも大きいのは、具体的に行動を伴う信仰の方が分かりやすいということです。

パウロが「ただ信じるだけでよい」と言っても、割礼を受け、律法を守っている人たちを見ると、その方がいいような気がする。それがガリラヤの人たちの気持ちだったようです。「しかし」、それらの考えは決して見過ごされることはありません。ここで使われている「しかし」は、強い逆接の接続詞が用いられています。

1:9 わたしたちが（以）前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する（から逸れた）福音（こと）を告げ知らせ（宣べ伝え）る者がいれば（なら）、（その人は）呪われるがよい（べきだ）。

パウロは繰り返し、同じことを言います。以前というのは前の節というよりも、前に訪問したときのことを指すのだと思われます。つまりパウロは、ガリラヤの人たちがユダヤ人キリスト者に惑わされることは、ある程度予測していたのでしょう。これほど早く彼らの心が移るとは思わなかったとしても。

なぜパウロがガラテヤの人たちの心が変わるだろうと思ったのでしょうか。それはパウロ自身がファリサイ派で、律法に忠実に生きてきた過去があったからです。自分も復活のキリストとの強烈な出会いがあって、初めて目が開かれたのです。キリストの信仰にのみ生きることの難しさを良く知っているのです。

福音を曲げて伝える人は、キリストの敵対者であり、呪われるべきだ。このパウロの主張は極端ではありますが、手紙を読む人、それを聞く人の心に向けるには、必要な表現なのでした。

#### <今日の箇所から>

パウロは「信仰義認」を説きます。それは、信仰によってわたしたちは義とされるのであり、行いを通して義とされるのではないという意味です。しかし「信じます」という思いは目に見えません。また何かをしたから褒められるという方が、分かりやすいのも事実です。

新約聖書のヤコブの手紙 2 章 14 節に、このような言葉があります。

わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。

この一節が「行いによる義」を強調しているとして、ルターはヤコブの手紙を「藁(わら)の書簡」と呼び、価値のないものだと言ったそうです。真偽や背景はさておき、パウロは手紙の中で「行いは必要ない」ことばかり強調しているのでしょうか。

そうではなく、パウロは「あなたがたはどんな人でも神さまに心を向けさえすれば救われる」ということをお伝えしたかったのではないのでしょうか。血筋や家系や職業や日頃の行いなど、神さまの目から見たらどうでもよいことなのです。

今回の学びは、これで終わります。次回は 9 月 25 日(水)10 時 30 分～で、「啓示としての福音、啓示の前後（ガラテヤ 1：10～24）」について学んでいきたいと思っております。